広島工業大学紀要研究編
第52巻（2018）177–186
翻　　訳

シャロレ伯爵（7）

リヒャルト・ベーア＝ホフマン著
松川　　弘*・訳

（平成29年10月25日受付）

Der Graf von Charolais (7)

von
Richard Beer-Hofmann

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Oct. 25, 2017)

デジレー：
でも，あの児は，懸命にあなたの言うことを理解しようとしています。あなたがあの児の前で，私たちの地所や通りに新しく植えられたクルミの木，新しい城の構造なんかを管理人が領主にするように忠実に報告してやるとき，彼は至極真面目ですもの！

シャロレ：
（微笑んで，真顔で）
管理人ね。
あの児にとってはそうだ！　私もそう思ってるよ。

裁判長：
それは違う！
だからこそ，わしは地所をみんなあんたの名前に転記させたんだ。あんたは領主なんだからね。管理人はロモントだ。

シャロレ：
そういう意味じゃないんです！　私も，以前は，ただ何となく，自分が自分自身の主人だと感じていました。ところが，あの児が生まれてから，自分が，この体内を――良かれ悪しかれ――父の遺産として巡っているすべてのものの管理人であることに気付いたのです。
（話しながら，デジレーの方に進む）
自分がそれをどのように管理しているのか，どのように殖やしているのか，私は，新しい主人に報告せねばならないのです！

デジレー：
本気でそうお考えなの？

シャロレ：
（デジレーの後ろに立って）
少し考え過ぎだね。
（微笑んで，幸福に満ち足りた様子で，頭を後ろにもたせ掛けて彼を仰ぎ見るデジレーの方に身をかがめる）
前の晩にどんな贈り物を貰ったのかすぐには思い出せない子供のように，僕は，毎朝，はっきりしない喜びに満たされて目を覚ますんだ。僕は，あの児が僕より幸せであることが嬉しいんだ。
（デジレーの髪を優しく軽く撫でて）
僕は，母親なしで成長したからね。「故郷」は，僕にとって，単なる言葉，空虚な形を成す音の連なりに過ぎなかった。僕はそれに，自前のもので内容を与えることは出来なかったんだ！　父祖たちによって子孫のために植えられ，その高い梢で，帰郷者たちを遠くから出迎える太古の樹の陰から，他人にはどんな調べが鳴り響いているのか，僕には予感できた！　動物たち，成長するもの，すべてのもの

* 広島工業大学工学部電気システム工学科

を，僕たちは単に見ているのではない。それらが僕たちをじっと見つめているんだ。時間が，それらすべてのものに相貌を与えている。思い出は，どの小道や泉にもまつわり，親しげに微笑みながら，誠実なまなざしで，「まだ覚えている？」と目配せする。これらがすべてあの児にはある！あの児は，僕も君も持っているんだ！

裁判長：
（非難を込めて，小声で）
それにわしも！

デジレー：
（なだめるように彼に微笑みかけて）
お父様もね！

裁判長：
わしがもう年だから，お前たちは，もうわしのことなど考えに入れてはおらんな！
（嘆息して）
それも道理だ！　あの児は，このわしから何を受け継いだと言うんだ！　あの児の成長振りを，わしは恐らく見届けられんだろう！

デジレー：
そんなことをおっしゃらないで！

裁判長：
だって，そうじゃないか！

デジレー：
私たちだって分かりませんわ！

裁判長：
お前たちは若いんだから・・・

シャロレ：
でも，私たちの存在に意味があったのは，あの児が生まれるまでででした。あの児が生まれた今となっては，造化は，もはや私たちを必要としていません！　私たちには，恐らく，隠居分を留保することしか許されてはいないのです。あの児が領地を相続したんですから！

（ロモントが入ってくる。戸口で，老下僕が彼の雪まみれのコートを脱がせる）

シャロレ：
（びっくりして）
もう戻ったのか？　君は，明日来るとばかり思ってたよ！

ロモント：
（デジレーと裁判長に会釈して）
雪のために，今年の建築は見合わせざるを得なくなったんだよ。でも，棟梁が，帰郷する前に現場で君と話したいと言ってるんだ！　明日，行ってもらえないだろうか？

シャロレ：
（庭に通じるドアに歩み寄って）
明日だって？
明日までに，切り通しが雪で埋もれてしまうかも知れない。そうなると，三時間分迂回せざるを得なくなる・・・
（すぐに決心して）
今から行こう！
（呼び鈴を鳴らして，玄関口に向かう）

デジレー：
遅過ぎるのではありませんこと？

（老下僕が入ってきて，シャロレの指図を受け，出て行く）

ロモント：
今，五時だ・・・

シャロレ：
九時には向こうに着けるだろう。

裁判長：
もう遅過ぎると思うがね。
（立ち上がる）
わしも，もう行かねばならん。

デジレー：
どちらへ？

（老下僕と二人の若い下僕が入ってくる。彼らは，シャロレのサーベル，帽子，手袋，乗馬用の長靴を持っている。彼はそれらを下僕たちに着せてもらう）

裁判長：
国事裁判所が，今朝，大臣によって召集されることになっている。六時開廷だ。
（シャロレに向かって）

いつ戻ってくるのかね？

シャロレ：
明日の晩になると思います！
（デジレーは立ち上がる）

裁判長：
（ロモントに）
君はここに残るんだね？
（ロモントはうなずく）
君に頼みがあるんだが。書記がやってきたら，わしが出廷することを伝えておいてくれないかね。明日の早朝，待っているとね。じゃあ，ご機嫌よう！

（ロモントはお辞儀する。裁判長は，シャロレに手を差し出し，デジレーの額に口付けして，手を彼女に差し出す。デジレーはそれに口付けする。老下僕が彼の前のドアを開ける）

老下僕：
（外に向かって呼びかける）
大旦那様の輿の用意を！
（裁判長に続いて立ち去る）

シャロレ：
（下僕のひとりに向かって）
準備が出来たかどうか，見てきてくれ！　君を連れて行こう！
（下僕のひとりが立ち去る。シャロレが長靴を履き終ると，もうひとりの下僕も出て行く）
（デジレーに向かって）
それじゃ，ご機嫌よう！
（彼は，デジレーに口付けする）
明日の朝，僕の代わりにあの児にもしてやってくれよ！

デジレー：
お気を付けて！

（彼女は立ち去る。子供部屋に通じているドアの敷居で，もう一度振り向いて，シャロレに会釈する。老下僕が，コートを二着，腕に掛けて入ってくる）

シャロレ：
古い方のコートでいい！

ロモント：
ともかく毛皮のコートだけは着て行けよ！　風が冷たいからね！

シャロレ：
いいよ，平気だよ！
（老下僕が，古い方のコートを窓際の安楽椅子に置いて，シャロレに剣帯の付いたサーベルを差し出し，毛皮のコートを彼に着せる。それから，彼に手袋を渡して立ち去る。手袋をはめながら）
さっきまで，宿屋の主人がここにいたんだ・・・

ロモント：
またかい！

シャロレ：
頼んでたよ・・・

ロモント：
秋と同じことだね！

シャロレ：
断わったんだが・・・

ロモント：
それで？

シャロレ：
本当をいうと，彼には気の毒なことをした！　彼の口調には・・・　行って，彼に伝えてくれ。以前通り，収穫物の販売斡旋を認めるとね。ただし，そのことは，君の取りなしで可能になった旨を付け加えておいてくれ・・・

ロモント：
何故なんだ？

シャロレ：
（帽子を取って）
その方が都合がいいんだ！　今日，行ってくれるかい？

ロモント：
今すぐ行くよ！　ほんの目と鼻の先だからね！

シャロレ：
（入ってきた下僕に向かって）
もう，準備は出来たのか？

下僕：
（うなずいて，ドアを開ける）
どうぞ！

シャロレ：
（ロモントに）
それじゃ，行こう！

（全員が立ち去る。舞台はしばらく空になる。バルバラが入ってくる。刺繍の入った小さな篭を持っている。彼女に続いて，デジレーも入ってくる。彼女は白い絹のドレスを着ており，少しベルトを緩めている。バルバラは辺りを見回す。デジレーは暖炉の方を指し示す）

バルバラ：
すぐに暗くなります。ここでは目を痛めますよ。あちらの方が・・・
（窓際の安楽椅子を指し示す）

デジレー：
あそこは冷えるわ。
（暖炉の方を指差す）
それじゃ，暖炉にもっと薪をくべてちょうだい！
（暖炉の左手のひじ掛け椅子に腰を下ろして，刺繍の入った小篭を取る）

バルバラ：
（暖炉に薪をくべる。暖炉の前に膝をついて）
火が付きますかどうか？

デジレー：
もうおき火がないの？

バルバラ：
（火かき棒をおき火に突っ込んで，ふいごで扇ぐ）
あまり起こりませんね！

デジレー：
火が起こらなければ，また呼ぶわ。

バルバラ：
すぐに明かりを持ってまいります。薄明かりの中では・・・

デジレー：
暗くなったら，すぐ止めるわ。薄明かりの中で，何もせずにいましょう。真っ暗になったら，明かりを持ってきて。

（バルバラは立ち去る）
（間。デジレーは刺繍を始める。ドアが急に途中まで開いて，フィリップがスッと入り込み，急いでドアを後ろ手に閉め，立ちつくす。デジレーは突然立ち上がり，彼を見つめ，ためらわずに，先ほどフィリップが入ってきたドアに行って，手を把手に当てる。以下の会話は，性急に，しかも密やかになされる）

フィリップ：
どこへ行くつもりなんだい？

デジレー：
（決然と）
自分の職務をわきまえぬ，しつけのわるい下僕に，私に何の報告もなくあなたの面会を許した理由を問い質すためです！

フィリップ：
ここでは，僕はいつも出入り自由じゃないか。君も知ってだろう！

デジレー：
一家の者以外は，無断に招き入れてはいけないと，一昨日，私は下僕たちに厳しく指図したのです！

フィリップ：
（すねて）
僕は親類だろう！

デジレー：
一家というのは，父と私，私の夫と子，使用人，場合によっては，ここに住んでいるロモントを指すのです。ロモントだって，入る前に，外から，入っていいかどうか尋ねますよ。
（少し軽蔑を込めて）
あなたのような誇り高い名前の持ち主なら，ここでは，大声で訪問を告げてもらえるでしょうよ！

フィリップ：
嫌味だなあ！　僕はここで，実子同様に育ったんじゃないか・・・

デジレー：
（怒りっぽく）
それなのに，あなたは，父の実子であるこの私をけなすことで，父の恩義に報いるつもりなんですね！

（気を静めようとする）
この度は大目に見てあげましょう。
（彼女を誤解しているフィリップの視線に答えるように）
下僕のことはね。でも
（自分の憤慨を乾いた口調で隠すように）
自分の来訪を下僕に告げさせるよう，配慮してください！彼がそれを忘れているようでしたら，「私が来たと言ってくれ！」と彼に命じてください。あなたにお会いするかどうかは，私が決めることです！

フィリップ：
ごもっともですね！

デジレー：
当然です！　それとも，待ち伏せたり，この家の回りを忍び歩いたりすることが，人の感情を害さないとでもお思いなんですか？　この何週間か，私が一人きりのときに，決まってあなたがやって来ることを，私は気にも留めませんでした。しかし，一昨日，私は，そこに計略が隠されていること，自分が一度ならずその計略に身をさらしていたこと，注意が必要なことに気付いたのです・・・
（心配を払いのけるかのように，話をやめる）
ここへどうやって来たんですか？

フィリップ：
（むくれて）
ロモントのために入口の錠が開けられたときに，横町からするりと入ったのさ。それから，噴水のところで身を隠していたのさ。

デジレー：
（蔑むように笑う）
夫が家から出かけるまで？

フィリップ：
（熱っぽく）
やつは財産目当てだ・・・

デジレー：
あなたにも分かりますか？

フィリップ：
馬丁が叫んでる・・・

デジレー：
（そっけなく）
あなた，誰かに見られたんじゃ？

フィリップ：
そんなはずはない！

デジレー：
外には・・・

フィリップ：
誰もいない！　階段のところにも！

デジレー：
そこにいてください！
（切り口上で）
バルバラがまたすぐ来ます。その後でお引取下さい。彼女に中庭の門まで送らせますから。あなたが行ってくだされば，私も一安心です！
（ドアから離れ，窓に向かって歩く）

フィリップ：
（憤慨して）
あなたは私に今，出て行けというんですか？

デジレー：
（突然，彼の方に振り向く。辛辣に，厳しく）
「私」でもなければ，「今」でもありません！　一昨日です！　それに，あなたは自分から出て行ったじゃありませんか！
（出窓のそばのひじ掛け椅子に腰を下ろして，外を眺める。窓を通して，夕日の幅広い条光が部屋に差し込んでいる。後ろの壁と左手には，光が当たっていない）

フィリップ：
（すね，落ち着きなく肩をすくめながら）
僕が一体何をしたというんです・・・

デジレー：
（彼の方を振り向いて，辛辣に）
ご自分がなさったことを，あなたはお尋ねになるんですか？
（憤りを募らせながら）
あなたは，私から安心を奪い，立ち直れないほどに，私の体面を傷つけたのです！　私は盲目ではありませんでした。世の中を見ておりました。毎日，憎むべきものや下劣なものの黄色い波が，回りに打ち寄せては砕けるのを知っていました！　でも，私は，自分なら世の中を確実に歩いて

いけると思っていたのです。その波は，今まで，私の服の裾さえ洗うことは出来なかったのです。私には誇りがありました！　しかし，今はもうありません！　それは，何かが，あなたを元気付ける何かが私の中で生じたからです！私にはそれが分からず，一昨日以来，私に出来たことといえば，せいぜい，シーツにくるまって顔をヴェールで覆い，外出せず，誰とも何も話さないことくらいでした。それは，口調やまなざし，歩き方，言葉の端々に，何か破廉恥な感情を誘うものが窺われるからなのです！

（絶望して）

廊下の暗がりで下僕が私の首に抱き付きはしない，私が馬の鞍から降りるときに，馬丁が何かに誘われて私を抱きすくめるようなことはない，という確証がどこにあるでしょう？　しかし，彼らは他人です！　でも，あなたは――共に育ったあなたは――私をご存知です。私の中に何が起こって，あなたをあんな行為に走らせたのか，教えてください・・・

（椅子からサッと立ち上がって）

一体何があなたの行為を正当化するのでしょう？

フィリップ：

僕が君を愛しているってことさ！

デジレー：

（憤慨して，厳しく）

その言葉は，あなたには禁句です！　これからも，私はその言葉を使いたい！

フィリップ：

（立腹して）

僕が君を冒涜したとでもいうのかい？　君たちに，その言葉がどうして必要なんだ？　君と償還された債務証書を，同時に贈り物として受け取った彼に，その言葉が必要なのか？　父親の指図通りに，彼が選んだ男と共寝した君に，その言葉が必要だというのか？　僕は君たちを冒涜してるかい？

（嘲笑して）

僕は，恐らく思い違いをしてるんだろう！　多分，彼は一生，君だけを思い焦がれていたのだろう！　君を知る前に，君の夢を見ていたんだろう！　すわって瞑想に耽っているとき，君の顔立ちを予感しながら砂に描いていたんだろう！　君が道端で乞食をしていたとしても，彼は，結局は，君を見つけ，どんなことをしてでも君を手に入れていただろう！

デジレー：

彼は私を愛しています！

（以下のやり取りは，次第にその性急さを増していく）

フィリップ：

彼が？　君を愛しているだって？　彼は君のことを知っているのか？　彼に，君のことが理解できるのか？

デジレー：

そんな言葉は，口実を求めている女たちと踊るときに，彼女たちの耳許でささやくがいいわ！

（無愛想に頭を振る）

私に言うのはお門違いよ！　私のことを何も分かってないくせに！

フィリップ：

（急に笑い出す）

君が彼を愛してるっていうのかい？

デジレー：

私は，あなたに申し開きをしなければいけないんですか？

フィリップ：

おや！　君は嘘をつきたくはないんだね！

デジレー：

もう，あなたとはお話したくありませんわ！

フィリップ：

そんなに彼のことを愛してるの？

君には，嘘をつく勇気も，真実を語る勇気もないんだな！

デジレー：

（怒りっぽく）

私は，夫と子供を愛してますわ！

フィリップ：

ちょっと待ってくれ！　その二人を混同するな！　君は僕をはぐらかそうとしてるね！　君が彼を愛しているのかどうか，はっきりしてくれ！

デジレー：

彼を愛しています！

フィリップ：
嘘だ！

デジレー：
私は今まで，嘘を言ったことはありません！

フィリップ：
今日まではね！　でも，この一つの嘘は，それこそ千の嘘に匹敵するだろう！

デジレー：
私は彼を愛しています！

フィリップ：
それじゃ，君はさっき，彼を見送りに窓辺に駆け寄っただろうか？　彼が戻ってくるまで，時間を指折り数えているだろうか？　彼が行ってしまったことで，この家が，君には荒れ果てたものに感じられるだろうか？　彼の不在が長引くと，彼のことが恋しくてならなくなるだろうか？　子と父を捨てて，彼と連れ立って家を出ていく勇気があるのか？　彼が死んでしまったら，もはや自分は生きてはいけないと感じているのか？
（次第に彼女に近づく）

デジレー：
近寄らないでください！

フィリップ：
（考え込んで，あざけるように）
君は自分が怖いんだ・・・

デジレー：
自分が怖いですって？　ごらんなさい！
（彼と向き合い，にらみ合う）
私はここにいるんですよ！　ここに！

フィリップ：
だからどうだというんだ！
えっ！　答えてみろよ！

デジレー：
お答えできませんわ！

フィリップ：
彼を愛しているだって！
（さげすむように）
それが何を意味しているのか，君にはてんで分かってないんだ！　かわいそうに・・・
（突然口調を変えて，嘆くように）
いや！　君はうらやましい！　僕には一つの世界があった。それは僕の望み通りに広がり，大きくなっていった。本当に豊饒な世界だった！　それが僕にはつまらなくなった！　その世界は空しく縮み，萎びてしぼみ，綿毛のように軽くなって風に吹き散らされ，下劣な吐息がそれを粉々に飛散させるまで，今や，この唇にくっついている！　何が残っているんだろう？　何かが
（拳を固めて）
あの愛が，泥棒のようにやって来て，すべてを奪い取ってしまったんだ！　今，あの愛は，じっとすわって，万物から養分を吸い取って成長し，僕の呼吸を止め，僕を破壊しようとしているのだ！
助けてくれ！
（がっくりくず折れる。デジレーは彼から顔をそむけている。二人は暖炉のそばにいる）

デジレー：
私はあなたを愛してはいません！

フィリップ：
君は僕を愛してくれるだろう。愛さなければならない！君には，僕を破滅させることなど出来まい！　僕に責任があるとでも言うのか？　僕は無抵抗だったのか？　子供のように，優しい感情に心地よく揺り動かされていたのだろうか？　あれは，僕には戯れだったのか？　最初の一滴で毒を感じ取り，拒まなかったのだろうか？　目と耳が僕を裏切り，それをすすり込んで，僕が逃げようとしたとき，僕の中に憧れがわき起こり，僕は眠りながら夢を飲みほしたんだ！　僕はまだ逃げ道を知っている！　ここにじっとしてはいない！　君の誇りが僕の足を踏み出させるんだ！

デジレー：
出て行ってください！
私はあなたを愛してはいません！

フィリップ：
君は僕を愛してくれるだろう！

デジレー：
いいえ！

フィリップ：
別に出て行く必要はない！　僕の命はないも同然なんだ！

すべてが混乱している！　昼も夜も――一握りの情熱もなく――時はいたずらに流れて行き――君に再会するまで――僕は，自分の血がこめかみに当たって砕ける音を聞いていよう。僕は，束縛されて，この愛の牢獄の深みに横たわっている。そこではもう，太陽も月も星も見ることは出来ないのだ！

デジレー：
（焦って）
立ってください！

フィリップ：
僕はここにいる！

デジレー：
誰かが来ると困ります！

フィリップ：
君は，自分の叫び声を気にしているのか？！　それは僕の命にかかわる！

デジレー：
そうです！
あなたがおっしゃるのとは，少し意味は違いますが！　あなたがここで私の足許に平伏しているのを誰かが見たら，それはあなたの命取りになります！

フィリップ：
僕の命は，君の足許に投げ出してある！　ここで，君の着物の裾をつかんでいること自体がすでに，僕にはこの上ない幸せだ！

デジレー：
（後退りする。二人は暖炉のすぐ側にいる。あたりは暗くなっている。暖炉の残り火からだけ，赤い光が二人を照らしている）
私に触れないでください！

フィリップ：
（彼女のすぐそばに寄るが，触れはしない）
腰からひだが流れ，帯がぴったり膨らみを締めている。その中には・・・

デジレー：
（コートをつかみ，それをはおる。厳しく）
言葉で，私を傷つけないでください！　お黙りなさい！
（おき火が明るさを増す。炎の照り返しが，下から，フィリップとデジレーの顔に当たる。熱と炎に満たされた暖炉の真っ赤に灼熱した開口部の前で，黒々とした彼らの姿は，一層際立って見える）

フィリップ：
（最初は哀願するようだった彼の声は，勧誘の響きを持ち，力強さを増して，今や，歓呼するように明るく聞こえる）
黙れだって？　黙って考えてみろとでも言うのかい？！　僕は一人で横になって，幾晩も眠らず，全身で君に向かって叫んでいたんだよ！
（あざけるように）
黙って考えろか！　それでも，君は毎晩僕のところに来てくれたけどね。
（デジレーは後退りする。コートが彼女の肩から滑り落ちる）
猟犬の群れが君の回りに殺到し，君を取り巻いて，あえぎながら，君が裸で僕の前に立つようになるまで，君の衣服を体から剥ぎ取っていたっけ！　僕は，君の体を知っている。その不可思議な秘密を知っているんだ！　なぜ後退りするんだ？　僕には，今，君の衣装を通して，君の膝が丸くなり，膨らみながら腰の方に反っているのが見える！　その腕で身を守ろうというのか？！　僕には，その下で，乳房が重い熟れた果実のように盛り上がり，恥かしさと怒りで真っ赤になって，そのつぼみを内に向けているのが見える！　僕を防ぐためにその腕をあげるのか？！　僕には，その下のくぼみから，金羊毛皮が輝き出しているのか見える・・・

デジレー：
気でも違ったのですか！

フィリップ：
そうだよ！

デジレー：
（悲鳴をあげる）
危ない！　薪です！
あなたの後ろに！　燃えています！　暖炉から転がってきたんです！　気を付けないと，火傷しますよ！　バルバラ！

フィリップ：
呼んではいけない！　暖炉に投げ返すよ！
呼ぶのはよしてくれ！
（ひどく燃えている丸木を掴もうとする）

デジレー：
火傷しますよ！

フィリップ：
呼ぶのはやめてくれよ！

デジレー：
じゅうたんが焦げてしまうわ！　危ない！　そこよ！

フィリップ：
（燃え上がるじゅうたんに身を投げ出して，炎をもみ消そうとする。それから，燃えている丸木を，力一杯，暖炉に投げ返す）
消し止めたよ！　落ち着いて！　心配はいらない！　この体で消し止めたから！
（立ち上がる）
呼ぶのはやめてくれ！
（はっきりしない声で）
今は誰も呼んじゃいけない！
（よろめいて，ひじ掛け椅子を手探りで捜し，床に滑りちて膝をつく）

デジレー：
（驚いて）
フィリップ！　どうしたの・・・？

フィリップ：
（疲れ果てて）
何でもない！　ただ腕が・・・！
（右腕をあげようとする。袖がズタズタに裂けている。彼は丸出しの腕を再びおろす）

デジレー：
（彼の上に身をかがめて）
まあ！　怪我をしてるじゃないの！　お見せなさい！
（ドアのところに行こうとする）

フィリップ：
ここにいてくれ！

デジレー：
包帯をしなくては！

フィリップ：
（嘆願する）
お願いだから，行かないでくれ！

デジレー：
人を呼ばせてください！　タオルを持って来させるんです。

フィリップ：
（ハンカチを差し出す）
ほら！　これが役に立つ！
だから，どうか呼ばないでくれ・・・

デジレー：
でも，水が・・・

フィリップ：
（首を回して庭へ出るドアを示す）
雪がある！　外の，階段の上だ・・・

デジレー：
（急いでドアを開け，くぼめた手のひらで雪をすくう。ひじ掛け椅子にすわり，床にうずくまっているフィリップの傷口に雪を当て，腕に包帯する）

フィリップ：
よし！　それでいい！
（小声で）
僕に同情出来ないのかい？

デジレー：
（逆らわずに）
いいえ！　同情してますわ！

フィリップ：
（性急に）
いや，違う！　僕はそうは思わない！　傷が痛むだろうと思ってかい？　これはもう痛くはないし，一週間もしたら，治るだろう。君のために僕がこんなに苦しんでいるからかい？　でも，心配する必要はないよ。もうさっきのような真似はしないから。もう君にあんな言い方はしたくないんだ。どうか，許してくれ！　忘れてくれ！　君にそれが出来るだろうか？

デジレー：
（厳しくはないが，まだ深く傷ついて）
忘れるですって？　いやです！　許してあげはします！

フィリップ：
それじゃ，許すと言ってくれ！
（子供のようにせき立てる）

「許します」って！

デジレー：
許します！　手を離して！

フィリップ：
（子供のようにすねた口調で
この手は君と僕を結び付けている。ありがたい！　僕の熱い額だけが，君の手にぴったりくっついてる！　君の手は冷たくて気持がいい！　僕の額が燃えるように熱いのが分かるかい？　熱がある子供，病気の子供なんだ！　僕に好意を持ってくれ！　僕を追い払わないでくれ！
（手で彼女に触れることはしないが，頭を次第に彼女の膝に擦り寄せる）
この子供は君には何の望みもない！　ただ，彼が君を愛していたことだけは信じてやって欲しい！　他には何もいらない！　また彼を愛してやってくれとは言わない！　ただ，信じてくれればいいんだ！　彼が君をこんなにも愛していたことを，君が信じないということが，彼にはとても辛いんだ！　彼を信じてやれるだろう？

デジレー：
何のために・・・

フィリップ：
話をそらすな！
話をそらすのは，嘘を言うのと同じだ！　でも，君は嘘をつかない。僕には分かっている。君は正直だ！　何を怖がっているんだい？　正直なのが悪いことなのか？　僕が君を愛していたことを，信じてくれるだろう？

デジレー：
ええ，信じますわ！

フィリップ：
（優しく）
君はなんて善良なんだ！　感謝するよ！　見てくれ，自分で立って歩けるから！
（ぎごちない動作で，戸口の床にあるコートをはおる）
君がそれを望むのであれば！　君の望みは，僕の望みでもあるんだよ！
（デジレーは身を起こす）
「あの人は私のことを思い，私を愛してくれている」と，いつも信じていてくれ！　たとえそれが君にとって何の意味もないとしても，信じていて欲しいんだ！　さあ，コートをはおって！
（すばやくデジレーのコートを床から拾い上げる）

デジレー：
なぜなの？

フィリップ：
庭を通って，小さな木戸のところまで，僕を送って行くつもりはないかね？

デジレー：
どうしてそこを通るの？

フィリップ：
中庭を通って戻りたくはないんだ。僕は，ここに忍び込んだとき，誰にも見られなかった。もしも，今，誰かが僕を見たら，きっと不審がるに違いない。

デジレー：
それが理由なの？

フィリップ：
（いかにも正直そうに微笑んで）
僕は嘘をつくつもりはない！　それも理由のひとつだけど。

デジレー：
他の理由というのは？

フィリップ：
（小声で，子供っぽい優しさを込めて）
君と二人きりでいたいからだよ！　何も怖がることはない！　僕は君に子供のようについて行くだけだよ！

デジレー：
あなたは今，私と二人きりでいるじゃないの！